



ともしび
マーケット

tomoshibi market
asakura kasumi

朝倉かすみ





講談社文庫

常州大学図書館
蔵しび書章

朝倉かすみ

講談社

【著者】朝倉かすみ 1960年、北海道生まれ。北海道武蔵女子短期大学卒業。2003年「コマドリさんのこと」で第37回北海道新聞文学賞、'04年「肝、焼ける」で第72回小説現代新人賞、'09年『田村はまだか』で第30回吉川英治文学新人賞を受賞。その他の著作に『好かれようとしない』『声出していこう』『夏目家順路』などがある。

ともしびマーケット

あさくら

朝倉かすみ

© Kasumi Asakura 2012

2012年6月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277292-1

目次

1. いい日 007
2. 冬至 033
3. 平河 061
4. ピッタ・パット 089
5. 232号線 123
6. 流星 157
7. 私^{わたくし} 191
8. その夜がきて 221
9. 土下座 251
- 解説 山口裕之 288



講談社文庫

ともしびマーケット

朝倉かすみ

講談社

目次

1. いい日 007
2. 冬至 033
3. 平河 061
4. ピッタ・パット 089
5. 232号線 123
6. 流星 157
7. 私^{わたくし} 191
8. その夜がきて 221
9. 土下座 251
- 解説 山口裕之 288

ともしびマーケット

1. いい日

かならずネスカフェなのでした。しかも大瓶なのでした。そいつを胸にふわりと抱え、薄笑いを浮かべつつ、ともしびスーパーマーケット鳥居前店店内をうろつきまわる女がいます。

髪の毛長い女です。前髪も長い。およそ八対二の横分けにしており、八も二も耳にかけています。そうして極度の猫背です。遠望すると二人羽織にんばおりをしているようです。それほど肩のうしろが盛りあがっているのです。

あれは、おそらく年季が入った猫背でしょう。年齢よわいは六十前後でしょう。おばあさん寄りのおばちゃんです。見知らぬひとに「おばあさん」と呼びかけられたら、目の玉にショックの色がひとさし入る、そんな年頃だろうと敷波智子しきなみともこは踏んでいま

す。

女は赤ん坊を抱くようにネスカフェ大瓶を抱えます。いわゆる「だっこ」の風情ふうせいです。

黒蓋くろがたの円筒形のネスカフェを抱えているのは右腕で、左手はトレンチコートのポケットにいれたまま。時折「おおよしよし」といわんばかりにネスカフェを揺すります。

片腕だけでの「おおよしよし」はなんだか片手間めいていて、「あこりやこりや」という感じ。まるで曾孫ひまごをあやしているようだと、女のようにすを見るにつけ、敷波智子は思うのでした。

敷波智子には九十六の祖母がいます。歳のわりには達者な祖母です。ひとりごはんもたべられるし、洋式ならば用も足せる。ただし歩行は苦手です。祖母はすり足で歩くので、わずかな段差も乗り越えられない。けれども、むかしのことはよく憶おもえています。訊きけば、こたえます。質問から微妙にはずれた返答ではありませんが、こたえることはこたえます。

先だって、敷波智子のいとこが子どもをうみました。祖母にとつての曾孫です。

初曾孫。いところが祖母に曾孫の顔を見せにいくというので、敷波智子も同行しました。

祖母の曾孫のあやしは独特でした。熱狂がほとんどありませんでした。というより、かのじよが頭をなべているその赤ん坊が孫の子だと認識しているかどうかも定かではなさそうです。柔らかで乳くさいものへの条件反射のように見受けられます。

それでも、白く濁った目をしょぼしょぼさせて、入れ歯の口をもぐもぐさせて、ほぼ無表情で曾孫に接する高年の祖母の顔には、えもいわれぬ愛情が滲^{にじ}んでいました。萎^{しな}びた乳房を赤ん坊にふくませる勢いすら感じます。祖母が始終口にする「むかし」よりも、遠い記憶がよみがえったようでした。

いとこや伯母や母親と一緒に笑っているが、敷波智子は怪しみました。どうして赤ん坊がそんなに愛しいのだろう。一も二もなく、愛情をそそげるのだろう。

これと同様の怪しさを、敷波智子はネスカフェを抱える女に感じるのでした。ネスカフェもネスカフェだとも思います。甘えん坊のようにみょうにくつたりと女の胸に寄りかかっている。

ネスカフェ大瓶には万国ほぼ共通のラベルが貼つてあります。赤いコーヒー碗に

漆黒の液体がなみなみとつがれ、そのおもてにあぶくが浮かび、湯気が立ち、碗のふちがピカリと光り、碗の下方にコーヒー豆が散らばって、という、すでに皆さまお馴染みのあの絵柄が、女に抱かれて揺すられる。無機ではなく、有機の揺れと敷波智子には思われます。ばー、と喃語のひとも発しかねないネスカフェ大瓶なのでした。

乳製品コーナーでした。本日、女とでくわしたのは、敷波智子がヨーグルトを選んでいるときでした。

敷波智子はナチュラル恵派ですが、日替わりで安くなっていたのはブルガリアのほうでした。かのじよは少し背をまるめ、どちらにしようか思案をしました。乳製品を陳列している冷ケースは真っ白です。ヨーグルトは下段にあり、覗いた顔がぱあっと白くなりました。

ともしびスーパーマーケット鳥居前店乳製品コーナーは、四角い島になっています。島を一周するようにして牛乳、チーズ、バターなどが並んでいます。ヨーグルトがおいてあるのは四角い島のはしのほう、ちょうど角にあたります。

敷波智子はほどよい冷気をふくんだライトに顔を照らされ、二十円の差額につい

て考えました。考えをめぐらせると、首もめぐつてくるものです。敷波智子はいつしか顔をあげており、頭部をゆるくふつていたようでした。

さまよう視線がふいに女をとらえました。女は乳製品島の隣のパン島で薄ら笑いを浮かべていました。トレンチコートのポケットに隠れた左手をだしてはしまい、だしてはしまいして、菓子パンをあらためています。時折、抱えたネスカフェを揺ります。「おおよしよし」。

敷波智子に衝動がわいてきました。

女が抱えるネスカフェに手をのびし、あらあらご機嫌でちゅねとラベルをなで、女の顔を上目遣いでさぐりつつ、おいくつですかと訊いてやりたい衝動です。訊いてやったらさぞ面白かろうと思うと、口のはたがいびつに持ちあがってくる。すると、さむぎむしさがやってくる。夜半に足の爪を切るような、切った爪が思いがけなく遠くに飛んで、よつんばいになって探しまわり、指の腹に押しつけて拾うような寒さでした。

敷波智子は専業主婦です。二十九歳です。五カ月前の六月に敷波^{しんご}信吾と結婚しました。新婚です。結婚を機にビル管理会社を退職しました。旧姓は市川^{いちかわ}です。